



Title	インテリア・デザインノート
Author(s)	本田, 安治
Citation	デザイン理論. 1968, 7, p. 73-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52495
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

インテリア・デザインノート

本 田 安 治

戦后、室内装飾と云う名称が、インテリアデザインと名を書変えられた当時は、新しい視点から此の分野を見直し、その研究に取組もうとする気概を込めて、此の言葉は常に新鮮さをもって語られて居た。しかし、各分野に於けるデザインと云う概念が、一応社会に定着すると共に、インテリア・デザインと云う言葉も又、一般化してしまい、家庭の主婦を対象とした日曜大工的実用書に於いてさえもそのタイトルに名を冠して堂々、巷間を賑わせて居る現状をみると、こうした世情の浮薄さとは又別に、インテリア・デザインの分野自体、果して当初の気概を持続しながら着実に進歩を遂げて来たのであろうかと言う疑問を起さずには居られない。

最近、此の分野に携る若い人達と話合つて印象付けられた事の一つに、彼等が、自分の取組んで居る仕事の全貌を把握し切れない悩みを持って居る事があげられる。即ち、インテリア・デザインと云う以上、それを構成する様々な要素、例えば材料とか家具、テキスタイル、或は照明、色彩などについて広範な知識の必要性は痛切に感ずるけれども、自分等は、そのいずれの専門家でもない。又、それ等を総合して一つの価値有る空間を創ると云つても、観念的には理解出来るが、その基準を自らの感覚や、数少い経験に求めるにはあまりにも独断的である様に思われると云う事であり、又、他の一方では、内外で発表されるデザインの理論、現象（これ等は、マスコミに依つて、ほとんど無制限に

近い状態で供給される)には実に敏感に反応するにも拘らず彼等が現実の実務の役割として演じて居る日常の場面に、それが如何なる形でつながってゆくかについての定見、方途を見出しかねて、焦燥に似た苦悶を重ねて居る姿もみられる。

こうした雰囲気の中では、少くとも自己の職能に対する落着いた研究や自信と云ったものは育ち難いし、結局、其時々^{その時々}の事象に対処する事に追われた確信のもてない思考や、行動が、デザイン上の安易な解決、模倣、流行に押流された形などを生む事となり増々インテリア・デザインに対する自身の認識を混沌に導くものとなって居る様に思われる。

今、彼等と云う言葉を用いたが、全体にこうした傾向が感じられる現在のインテリア・デザインについては、今一度深く考えられてみるべきものが有る様に思う。

若し、既に外形が出来上った建築物の内部を室内として使用出来る様に取り扱うのがインテリア・デザインであると云う分業的な形でとらえるならば、確かに一つの分野として建築術の進歩に歩をそろえながら日々の発展を遂げて居ると云えるかもしれない。

しかし、都市計画と云う巨大なものから始まり、最少単位のインテリア・デザインに至るまで一連の生活環境デザインの中でこれをとらえた場合、人間の生活に密着した部分を取り扱う為の基礎的な研究が巾広く且つ十分に進められた上での積極性をもって建築デザインと結付いて居るかどうか、又、インテリア・デザインが最も身近かな形で人間生活に接触する建築の皮膚の役目を担うものであるならば、従来、ともすれば、デザイナーの感覚的な資質にたよる皮膚の表情面が強調されるあまりに、それを支える皮質の研究が忘れ勝ちになったまま放置されて来たのではないかと云う疑問が残るのである。

勿論、デザイナーの持つ美的感覚の資質はインテリア・デザインと云う造形行為にとって尊重されなければならないものであり、デザイン上の諸概念をし

ぼってゆく焦点としてそれを使いこなす事は大切であるけれども、問題はそれを人間生活の場としての環境と云う実体、物質的な現象に変化させる事であり、又、特定でない人間集団の意志に関わらせる為の、客観化の手段をそれに与える事なのである。

例えば、或る室内の色彩はその形体、明るさなどに対して最も効果的に結付いて居るだろうか、それは人々のどう云う感情に対してなのか、はたしてその効果に対する各人の反応が同じものだろうか、生理的な充足が感情面の満足に対してちぐはぐになって居ないだろうか、等と無限に発展する疑問に対して、デザイナーは先ずこれ等を如何に整理すれば良いかについて考え、それに対処する方法について想をめぐらし、そして、それを形に導く手段を適確に把握しなければならないのである。

現在、建築デザインの分野に於いては、都市環境との関連、或は工業生産化の問題など巨視的に提起される問題を解決しようとする新しい努力がみられ、インテリア・デザインも又、これと全く無縁ではないけれども、過去、建築デザイン発展の蔭には、常に、計画学、環境工学、設備学など、その基礎となるものが、学問的な大系を整えつつ真剣に整備されてきたわけである。しかし先にも述べた様に、インテリア・デザインは広義の建築の一部であると言う分業的な立場に甘んじ易く、そうした基礎的な研究は、当然建築の分野に含まれるものとの安易な先入観が、一方では「創作」と云う名を借りて、デザイナーの感覚的資質への偏重を助長し、他方では、インテリア・デザインの分野に対して、科学的な諸問題に直接関わりを持つ機会を遠避けたのである。

此の事は、単にインテリア・デザインと科学の間を疎遠にしたと云うのみならず、人間と科学の間に於ける本質的な問題の理解に直接タッチする機会を自ら放棄した事を意味して居る。結果、人間の生活に最も密着した部分を扱う分野であるにもかゝらず、インテリア・デザインの立場から、現代の科学文明と人間の問題について、積極的な提案も多く生れて来なかったし、又、デザイ

に上当然必要とされる専門的な科学の分野に対する協力の姿勢も強力に整わなかったと思われるのである。

生産に当って、あらゆるものが専門的に細分化されて行く傾向にある現在、自らの立場で、周囲を取まぐ諸々の現実を精密に把握する努力を他にあずけ、或る程度に完成された建築と云うお手本の上になっただけしか物を視、考えられない処からは、その分野の問題としての真の発想、発言は生れて来ないし、又それ故に、他の分野との真の協調も望めないと思われるのである。

インテリア・デザインを端的に表現するならば「その構成に必要なすべての要素を経済的な関連に於いて組織的に計画し、人間の日常生活に最も身近かな環境の場を具体的な実体として創り上げる事」と云えるであろう。だが、具体的な形を造ると云う事は物理的な技術工学に依存し、出来上った実体が知覚されるのは、視覚、聴覚、触覚などにつながる人間の心理に依存する。そして実体の価値は人々の使用上の生理的な充足、美の認識と云う人間の心情、社会の連帯につながる人々の生活感情の心理などに依存して居るのである。

こうした複雑な物と物、物と人との関わり方について仔細に観察するならば、インテリア・デザインの立場で研究されなければならない、科学と人間に関するテーマは無限であり、此の分野を充実したものに導こうとするならば、自ら持合せて居ない空白の部分を、他の専門分野の力を借りながら、それと協力して埋めてゆく姿勢を進んで示す事が最も大切であろうと思われる。

しかし、これは口で云う程簡単ではない。例えば、デザインが科学と接触し、研究を進め様とする場合、当然ゆき当るものとして、科学的な物の視方と美的な物の視方の総合と云う時点で起る種々な矛盾、紛らわしさと云ったものが考えられる。もともと物質的な現象を科学的に観察する知的な態度と、直観的に観察する美的な態度には大きな差がある。前者が物を、計測可能な量でとらえ様とするのに対して後者は、物を全体に関わる質としてとらえ様とする。故に、インテリア・デザインに於いて重要な要素として考えられる光、色彩、音響と

云ったものも、元来は美的な造形そのものを第一義としない物理学や化学、心理学などに於いて専門的に研究、発達させられたものである為、統計的にとらえられた精密な結果は、出来上った造形に対して、欠陥を指摘すると云う形でしか結付かないと云う事も起り得る。

これをデザインの側から云えば、そうした科学的なデータは、完備されて居る様にみえるけれども、何か杓子定規で、造形に対して断片的には活用出来ても、積極的には何も教えてくれるものが無いと云う事になる。

こう云う事から、デザインと科学の間にあって、提案される問題が何に起因するものであるかを明らかにし、その解決には何が本当に必要なのであり、又何が不必要なのかを的確に示す立場の訓練が要求され、それに依ってデザインと科学が人々の生活要求に対して一つに結付く事が望ましいと思われるのであるが、インテリア・デザインの分野で現在、一番欠けて居るのがこの立場での研究である様に思う。

最近、人間工学の導入による家具の研究や造形を第一義の目的とした心理学、或は照明学などの研究が漸く目立ち始めた様であるが、従来おくれて居た他の専門分野との協力を進める為にも、インテリア・デザインの分野に携る者の間から、こうした動きに対して積極的な協力的発言が活潑に行われる事が望ましいのではなからうか。

以上の様な観点から、インテリア・デザインの実務に携って居る者の立場上、常に取扱わなければならない光や色彩について2、3の例をあげ、デザインと科学の結付きの様子を述べてみ度い。

かつて「色彩調節」と云う考え方が非常な勢いで世間に登場して来た時代があった。当時、建築学生であった私は、色彩学の専門書の中に“建築の色彩は科学的に取扱われて真に役立つものであり、勘とかセンスで色彩を扱うのは、建築家の色彩学に対する怠慢、或は無智を示すものである”と云う様な意味の事が書かれて居るのを、一種の恐怖に似た感動を抱きながら読んだ記憶がある。

当時、建築家の側から、それに対する反論も行われ、結局、結論として明確なものは出なかった様であるが、日常インテリア・デザインの要素として、色彩を扱ってみると、その全てが科学的に研究された結果であるが故に、デザインに対して支導性を持つかどうかには大いに疑問をもつのである。

例えば、色彩学では、暖色、寒色と云う分類が行われ、心理学的には可成りの普遍性が認められるところから、よく、北側の部屋は暖色系の色彩を用いて暖い感を強調した方がよいなどと言われる（デザインの啓蒙書などにもこう断定したものが多い）。しかし色彩本来の効果から云うならば、空の反映からくる薄青色の北側日光に対しては、暖色系よりも寒色系の方が新鮮さを保つのであり、此の場合、生理的、物理的には意味のない、心理効果の暗示を求めるよりも、暖房と云う物理的な働きにたよって、生理的な充足を得られるならば、色彩と光の関連に於ける動的な効果を取入れた方が、より快適な心理的環境を作る事が出来るのである。

又、色彩の科学が造形に結付く時、調和の理論が先ず語られるけれども、インテリア・デザインの色彩について考える時、最も大切にされるべき事は、変化する光のスペクトルの色と、構成材の色との関係である。材料の色を、与えられたスペクトルの、或る種の光の帯を吸収し、他を反射する手段として考え、インテリア空間の中で色彩を光の変化と共にとらえ様とするわけである。赤い敷物は、そこに照射された光の中から青、又は緑の光の大部分を吸収するだろうし、青い壁は赤い光を吸収する。此の事は日光から人工照明に移り変わる場合の光の質、光の量を決定する鍵となるものであり、色彩の調和もこうした変化する異った光の中で反射する光がどの様に保たれるかと云う形の関連で考えられなければならないことを示すものである。

もともと日光はうつろい易いものであり、科学的な研究対象にはあまり向かないものであるけれども、インテリア・デザインに於いては、そのうつろいの変化こそ与えられた特権として、デザインに生かされるべきもののなのである。

昔しの日本建築にみられる自然の時間的推移をそのまま、取入れた空間構成に於ける昼光の演出性の魅力はデザイナーを引つけるに充分であるが、科学的には、どの様な研究法を用意すれば良いのであろう。

光が物理的のみにはとらえられない面で次の様な問題もある。我々が古いタイプの美術館などで良く経験する事であるが、採光を、トップライトだけにたよった館物がある。中に入ると、何とも云えない陰うつな感じがして、暗さを連想させるが、実際、壁面に飾られた絵などを見る目の高さでの照度は、むしろ我々が陰うつさを感じない他の建物の室よりも高い場合が多い。此の場合、室の上部に於けるより高い平均した光と、室内の明るさとの対比に依って、此の陰うつさが生じるわけであるが、此の事は、明るさ暗さの評価が相対的なものであり、光や色彩が感覚的なものであるから物理的には常に扱えない事を示して居る。こうした光や色に対する人間の反応の仕方など、造形を目的として、科学的にはまだ充分に捕えられて居ない様である。

次に、光に関連する照明について考えてみよう。

照明には、元来、物が見える様に照らす機能と、空間に情緒的な表情を与える表現の機能との二つがある。従来の照明学は、此の二つの内、前者の方の機能を追求する事に力を注ぎ、生理的な目の能力、つまり良くみえる事によって起される心地良さと、見えにくい物をよく見ようと努力しなくてはならない時に起る障害に関連した人間の感情について研究して来た結果、我々が仕事をする為の照度とか、それをさまたげる、まぶしさの問題などの基準についてはデータも完備されて居ると云えよう。しかし照明技術の工業的な開発は、いささか照明の問題を全体的に把握する事よりも先走った感じもあり、蛍光灯の異状な普及が人間の生活を単調な画一化に導く結果をもたらせたり、又現在、地下街などの様に照度の高い全面的な人工的照明の採用に依る環境が人間に対して生理的或は心理的にどの様な影響を与え続けてゆくものであるかについて考えさせられる問題を含んで居るとも言えるのである。

それでは、後者の、表現の機能はどんな仕組でインテリア・デザインに取入れられるのであろうか。ケベッシュの「視覚言語」の中に次の様な一節がある。

《空間を経験することは光を経験することと密接に結びついている。光の無いところに視覚の世界は無いし、視覚の世界のない処に可視の空間はあり得ない。視感覚でとらえる空間は光の空間である。普通にはこの光の空間は見えるものではない。われわれは、光が何かの媒体でさえぎられたときに始めて空間関係を理解する。われわれが空間世界として実際に見ると云う事は、光を分析して又それをまとめ直す事なのである。これはつまり、いろんな媒介で光がモデュレートされる方法なのだと云うのである。そこでいろんな色彩感覚、即ち、モデュレートされた光の感覚での現わし方は物体や現象の空間秩序のつけ方の方法となるのである》。

これを照明学的にみるならば、この機能の効果は、その場所にどれだけ光が当たっているか（照度）によるのではなくて、その場所に在る物体が人の目に見えて来る明るさ、即ち物からどれだけの光がはね返ってくるか（輝度）に依って居ると云う事であろう。先に色彩の例でも述べたが、此の表現の機能効果をインテリア・デザインに取入れる時、光を当てる方向とか強さだけでなく、光を当てる物体（例えば壁とか床等…）の仕上げ方、色彩などが重要な意味をもつと同時に、人間の目が同時に二つの異った明るさの状態に適合出来ないと云う生理的な面の処理に関する扱い方にも関わって来る。そして現在では、色彩学や心理学でも、色と表面（つや、地肌、透明感等）の間の問題については科学的な研究があまり進められて居ない様である。

照明に関係して、照明器具についても一つ考えてみよう。

近頃、インテリア・デザインに於ける照明が重視されるにつれて、器具デザインの国際的なコンペが行われたり、ムード照明と銘打って、いさゝか装飾過剰な器具が大々的に販売されたりして居るけれども、照明器具には、先の照明の機能と同じ様に、他の物体を見える様に照らす機能と、自らが光を出して注

意を引き易い事から、他のものと同じ様に人の目を吸引して、見られるものとしての機能を持って居る。そして、此の見られるものの機能が照明器具のデザインとして、インテリアの雰囲気構成するのに役立てられて居るわけであるが、先にも述べた様に、照明の表現機能、或いは照らす機能を利用しても、それを反射する物体の面のデザインを考慮すれば、可成りの雰囲気構成に役立つと云う事を考えれば、作ろうとする努力が逆に雰囲気を壊す結果となる様な妙な照明器具をインテリアに持込む以前に、もっと室内の光の分布について考えられる事が必要ではないかと云う助言を与える事が出来る様に思われる。

以上、色彩や光に関するわずかな例に過ぎないが、インテリア・デザインの要素として取上げられるものすべてにわたって、他の専門分野と協力しなければ、到底解決出来ない問題が微妙にからみ合いながら控えて居る事がわかる。

これを整理してゆく事が、始めに述べたインテリア・デザインの科学に対する疎遠を取もどす事にもなり、新たな発展の基礎となるものと思う。

研究と云うにはあまりにもおこがましいが、インテリア・デザインの業務に携る者として日常感じて居る事の一端を述べる事に依り、此の分野に何等かの裨益をもたらすかもしれないと云う期待から敢えて筆をとった次第である。